

生徒指導の3機能を具現化

自己存在感

自己決定

共感的人間関係

自己存在感を与える

一人一人をかけがえのない存在として捉え、その個別制や独自性を大切にします。このことが、子どもの「やればできるんだ。」という気持ち（有能感）を育てることにつながります。

1 ネームプレートの活用

A君が発表した内容がすでに出ていたB君の意見と似ていた場合、教師は「他にはないかな？」などと言って他の子の違う意見を聞き出そうとしてしまう。

教師のこういった何気ない進め方一つをとっても、A君にとっての「自己存在感を失わせる指導」となってしまうことがあります。

教師は常に「A君の意見はB君の考えと似ているということだね！じゃあA君の名前をB君の考えの横に貼っておこう」と言って、A君の意見を大事にしているというレスポンスを示さなくてはならないのです。

このような場合に**ネームプレート**はとても便利です。一度作ったら年度末まで使えるネームプレートを活用し、みんなの自己存在感を高める工夫をしていきましょう。

2 全員とのお話タイム

学校アンケートやいじめアンケートなど、子どもたちにアンケートをとることがあります。その際、「悩みや困っていることがあれば書きましょう」という欄があり、子どもたちは自由に記述できるようになっています。

しかし、自己存在感が低く、困っている子どもたちは「悩みがある」などと書いてくるはずがありません。なので、初めから**全員とのお話タイム**を設けておきましょう。

クラスの子どもたち一人一人が「先生と2人で話して自分のことを気にかけてくれた」と思えることは、子どもたちの「自己存在感」を高めることにつながります。

3 心の第2担任制

子どもたちは多かれ少なかれ、「先生を独占したい」「先生と二人きりがかまって欲しい」という願いを抱えています。先述した「一人一人とのお話タイム」に似ていますが、「心の第2担任制度」が提案されています。

「心の第2担任制度」とは、「自分の話を聞いてほしいと思う先生を2～3人選び、その中の一人と10分程度話をする」というものです。

また、「選ばれた教師は普段から気をつけて見たり、積極的に声をかけたりする」ということも行なっていきます。

つい、担任との一対一対応になりがちな学校を他の教員との結びつきも強くしていくことで、子どもたちの「自己存在感」を高めることができます。

4 異年齢の活動

遊びや学習、掃除や登下校など毎日の生活の中に「異年齢での活動」をどんどん取り入れることも「自己存在感」を高めることにつながります。

- 甘え欲求の強い低学年は高学年と一緒にいることで心が満たされる。
- 高学年は低学年に頼られることでしっかりとしてきて、自分の成長を実感したり、存在感を感じられたりする。

「異年齢活動」はどの学年の子にも「自己存在感」を高める機会になります。ぜひ、積極的に取り入れてみましょう。（※縦割り活動の充実）

5 担任等の手立て

- (1) 子どもが話しかけてきた時は、手を止めて最後まで話を聞くように心がける。また、気になる児童には意識して話しかける。
- (2) 1日1回は認める声かけをする。
- (3) 一人一人のよい行動を見逃さず、褒め、認め、価値付ける。
- (4) 一人一人のよさを伝える場を設ける。（ノートのコメント、学級通信、帰りの会等）
- (5) 学校生活や委員会活動等でその子どもに応じた活動の場や責任をもたせる場を与える。
- (6) 教師の声かけとしては、「・・・しているね。」「ありがとう。」「嬉しい。」「助かった。」などのアイメッセージ

6 自己存在感を与える授業

児童一人一人に学ぶ楽しさや 成就感を味わわせることができる授業

→授業に意欲を見せない子どもや学業不振の子どもにも学習に向かえる配慮をする。

→子どもの実態を把握し、授業のどの場面でどの子どもを生かすか工夫する。

生徒指導の3機能を具現化 ※判断力関連

自己存在感

自己決定

共感的人間関係

自己決定の場を与える

一人一人をかけかえのない存在として捉え、その個別性や独自性を大切にします。このことかが子どもの「やればできるんだ。」という気持ち(有能感)を育てることにつながります。

子どもたちが普段見せている行動は「子どもたち自身によって自己決定されたもの」でしょうか。

教師が説く「あるべき姿」を先取りして、自分から進んで「教師の望むいい子」になってはいないでしょうか。

ここでいう「自己決定」とは以下のように定義されています。

自己決定とは、教師や親からのアドバイスを参考にしながらも、自分がどう生きて行くかを自分で決め、自分の可能性を切り開いていくこと。

このように自己決定するための情報を提供し、自己決定の場を様々なシーンで与えることが大切です。

1 学校行事等での自己決定

まず、あげられるのが「学校行事での自己決定」です。

決められたコース、決められた行程をただ旅行するだけの修学旅行で子どもたちの「自己指導能力」を育むことはできません。

- コースを自分たちで決める。
- 行く場所を自分たちで決める。
- 休憩時間の取り方も自分たちで決める。

教師が決めたことに従わせるだけなら、管理もしやすく、教師の目も行き届き、指導自体は楽になるでしょう。

子どもたちに自己決定させるためには、「あらゆる場面」「あらゆるシーン」を想像し、教師が手立てを打っておくことが必要になります。

指導の負担が一気に増えてしまうことは目に見えています。

しかし、だからこそ子どもたちが「自己決定」することで「自己指導能力」を高めることにつながるのです。

2 各教科での自己決定

知識や解き方を一方的に教え込む、一斉指導では「自己決定の場」を与えることはできません。

与えられた知識、解き方を使いながら、自分で問題解決の方法を探り、試行錯誤できる授業づくりが必要です。

まさに、「主体的・対話的で深い学び」の実現こそが、「自己指導能力」をつけることにつながることを実感しますね。※判断力（付けたい力）

- 答えではなく、解き方を考える
- 選択肢の中から正しいと思うものを選ぶ
- 答えのない問いにも、自分の立場を明確にする

教師の授業改善で子どもたちの「自己指導能力」は高められます。

3 教師の手立て

- (1) 指示するのではなく、自分で考えて決めさせる。
- (2) 判断に困っている場合は、選択肢を与えたり教師の思いを伝えたりする。
- (3) 自分で決めたことは責任をもたせる。
- (4) 子ども自身がよりよき言動に気付き、修正を促すメッセージを使う。
- (5) いろいろな活動に、ねらいや目的意識をもって取り組ませる。
- (6) 係活動や委員会等で、児童が自ら気付き、行動する経験を多く積みせ、価値付ける。
- (7) 1日1回は、自分の思いや考えを伝える場を設ける。

4 教師の声かけ

- (1) 「あなたは、どう思うの」「あなたは、どうしたいの」「1・2・3のうちどれ？その理由は？」「先生はこう思うけど、君は？」（アイメッセージ）
- (2) 「私は、今、とても話にくいんだけど・・・」 アイメッセージ
- (3) 「あれ、学級のルールは何だったかなあ」 確認の質問

5 自己決定の場を与える授業

自ら課題を見つけそれを追究し、自ら考え、判断し、表現する授業

- 思考場面や観察場面で、考えたり、観たりする視点を示す。
- 自分の考えや思考過程が分かるようなノートの取り方を指導する。

生徒指導の3機能を具現化 ※協働力関連

自己存在感

自己決定

共感的人間関係

子どもをありのままに受け止めます。このことが、子どもの「自分は周りの人から受け入れられているんだ。」という気持ち（他者受容感）を育てることにつながります。

現在、子どもたちの「コミュニケーション能力の低下」が大きな問題となっています。不登校、いじめ、非行など子どもの問題行動の背景に共通しているのが「自己存在感の低さ」と「人間関係能力の低さ」だと言われています。

目指すべき学級経営、理想の学級とは「秩序とふれあいのある学級」です。具体的にいうと以下のような学級を目指します。

- 学級内にルールが定着し、侵害される心配がない。
- ここに居て安心できると思える。
- お互いを認め合える雰囲気がある。

1 小集団を活用する

ずばり、「小集団の活用」です。ペアやグループ、班などの小集団を作り活動の場を仕組みましょう。

そこで、「他の子との心のふれあいを体験すること」で共感的な人間関係を形成していくことができます。

「構成的グループエンカウンター」と言われている活動も同様です。

構成的グループエンカウンターとは、リーダーの指示した課題をグループで行い、そのときの気持ちを率直に語り合うこと「心と心のキャッチボール」を通して、徐々にエンカウンター体験を深めていくものです。

構成的グループエンカウンター「図書文化」より引用

- ・ みんながんばっているんだ。
- ・ 悩みはそれぞれ持っているんだ。
- ・ 協力してがんばったら前向きになれたぞ。
- ・ みんな僕のことを認めてくれている。

そのような心の交流を積み重ねることで「共感的な人間関係」は形成されていきます。

2 異年齢での取組を

「自己存在感を与える」にも具体例としてあげた「異年齢での取組」は「共感的な人間関係の形成」においても効果を発揮します。

- 低学年は高学年を頼れる上級生として慕い、信頼できる。
- 高学年は低学年に頼られることで、大切に思い、接する。

教室内だけでは体験できない「人間関係」を教師が仕組むことで「共感的な人間関係」は築いていくことができます。

3 共感的人間関係を育む授業

お互いに認め合い、学び合うことができる授業

- 子ども一人一人を受け入れて褒め、子どもの人間性を認めながら指導する。
- 教師主導にならず、子どものテンポに合わせてながら授業をすすめる。

まとめ～木上小学校 誰一人取り残さない教育実践を目指して～



付けたい力：判断力・読解力・協働力

全ての児童に【出番】を与える

一人一人の子どもが、各教科の時間に、自分の考え方、感じ方をもって(自己決定)、それをみんなの前に示す(自己存在感)。そして、子どもは互いに相手を受容していく(共感的な人間関係)。

これを日々の授業の中で行うことで、子どもの姿勢は変容する。

「認める」から「認め合い、励まし合い、磨き合い」へ

子どもが主体的に学びに向かい、対話的な学びが充実し、深い学びを生む学習集団となることで・・・

- ※ 子ども同士がお互いに認め合い(共感的な人間関係)、一人一人をかけがえのない存在として大切にし(自己存在感)、自分で考え、判断して行動する(自己決定)ことができる。
- ※ たとえ成果が現れていなくても、こだわりをもって努力したり工夫したりしたことは認めることが大切である。